

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K11902

研究課題名(和文) 総力戦下の「制服美女」と戦後のキャリア形成の表象とその継続性の分析及び国際比較

研究課題名(英文) International Comparative Studies on Representation of "Pretty Women in Uniforms" and Their Career Development at War and Post War

研究代表者

杉村 使乃 (SUGIMURA, Shino)

 公立女子大学・文芸学部・教授
 〒100-8303 東京都千代田区千代田1-1-1

研究者番号：20329337

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：総力戦下の「制服美女」に着目し、メディア分析を通し、戦後への影響について考察した。第二次世界大戦期、戦後から1960-70年代までを視野に入れ、映画や雑誌など一般大衆メディアから軍服に類似する制服を身につける仕事に就いた女性たちの表象を抽出し、その傾向について分析し、日本、アメリカ、イギリスの国際比較を行った。「制服美女」の表象の連続性を鑑み、研究期間後半は女性警察官の表象分析に注力した。警察官という職業や制服着用という行為に、性差、あるいはエスニシティによる差異は見られるか、戦時下の「制服美女」に見られた「女性性」からの「逸脱」と「補完」が戦後も継続して見られるのか、比較検討を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、総力戦下、また戦後における伝統的に男性中心であった軍隊や警察における、女性の労働力の動員のあり方と、そこで働く「制服美女」のメディア表象に着目してきた。戦時下の女性像に関する研究は近年、多くの研究成果が見られるが、各国のケースのみならず第二次世界大戦期、戦後から1960-70年代までを視野に入れ、映画や雑誌など一般大衆メディアから軍服に類似する制服を身につける仕事に就いた女性たちの表象を抽出し、戦時下の「制服美女」に見られた「女性性」からの「逸脱」と「補完」が戦後も継続して見られるのか、比較検討を行なった。研究成果は国内外の学会で発表した。

研究成果の概要(英文)：This research group has been discussing how women in uniform were represented in the mass media in Japan, the U. S., and the U. K. during and after WW II. Facing the necessity of the mobilization of the entire population, women in WW II took on a variety of roles. Especially, the women who worked for military and police service posed the greatest challenge to the conventional concepts of gender norms. How their paradoxical transgression from femininity were shown in the media and what influence they had on the formation of gender norms in the postwar era were explored. In the second half of the term, this research group focused on analyzing popular images of policewomen and how those images changed after WW II. Policing used to be a male-dominated profession, though world wars facilitated the advancement of policewomen in these countries. The postwar mass media of each country reported on the changes of their status, reproducing and sometimes subverting their popular images.

研究分野：イギリス文学、イギリス文化

キーワード：ジェンダー 表象 メディア 制服 キャリア 日本史 アメリカ イギリス

1. 研究開始当初の背景

本研究は「戦争とジェンダー表象研究会」として、2004年度より、第二次世界大戦下、イギリス・アメリカ・中国・ドイツ・日本において刊行された女性雑誌・一般大衆誌のジェンダー・エスニシティ表象を分析し、国際比較を行ってきた。戦時下において、女性やマイノリティは「国民」として動員され、大きな貢献を果たした。一見、平和主義的と解釈されがちな女性たちが、「総力戦」においては「国民」としてあらゆる場面に動員されてきたことは、日本では「戦争とジェンダー表象研究会」の中心でもあった加納実紀代の『女たちの銃後』(1987)他の研究が明らかにしてきた。またスヴェトラナ・アレクシェーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』(1985年)など、各国で戦争に関わった女性たちの声を記録する試みが評価されるようになっていた。

女性の軍事化については、シンシア・エンロー、佐々木陽子、佐藤千登勢、佐藤文香らが、具体的な事例を挙げ研究成果を重ねていた。林田敏子は『戦う女、戦えない女：第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』(2013年)で第一次大戦下のイギリスの制服の女性に着目しているが、本研究は第二次世界大戦以降、そして現代にまで視野を広げているところが特徴となる。林田はまた、本研究でも着目した女性警察官について、イギリスのケースを取り上げた数少ない研究成果を残している。

戦争とメディア表象については、メディア研究、表象研究の立場から研究成果が発表されている。サム・キーン『敵の顔-憎悪と戦争の心理学-』(邦訳1994年)やジョン・ダワー『容赦なき戦争：太平洋戦争における人種差別』(邦訳2001年)、若桑みどり『戦争がつくる女性像』(1995年)はこの分野の先駆けである。本研究で扱う雑誌・映画といった大衆メディアから、乾淑子『着物柄にみる戦争』(2006年)など衣服や日用品など戦争を伝える媒体は多岐に渡る。異なるメディアの相関関係を検討した大塚英志編『動員のメディアミックス 創作する大衆の戦時下・戦後』(2017年)も発表されていた。

本研究は、戦時下の大衆メディアにおけるジェンダーや人種・エスニシティの表象について分析するだけでなく、その傾向が戦後にどのように継続しているのか検討した点が特徴的である。戦時下で女性やマイノリティに開かれた門戸が、戦後のジェンダーや人種・エスニシティの平等を促進したのか、また、戦時中の女性・民族政策が戦後のジェンダー秩序や「国民」形成にどのような影響を及ぼしたのか検討してきた。戦時下から、戦後、フェミニズム運動が盛んになる1970年代までを視野に入れ、一般大衆メディアの表象分析を元に検討し、戦後体制におけるジェンダーとエスニシティの交錯について、国際比較を行った。

本研究は、上述の「戦争とジェンダー表象研究会」として、2004年度より第二次世界大戦下の大衆メディアを用い、ジェンダー・エスニシティ表象を分析し、国際比較を行ってきた。通常の研究会の他に、京都大学地域学統合情報センター(CIAS)共同利用、地域情報学プロジェクトテーマ「非文字資料と集合的記憶」(2013-14)、神奈川大学非文字資料研究資料センター(2013)、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院(2016-17)と合同研究会を開催した。これまでの科研費研究課題は以下のとおり、「表象に見る第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」(2005-07 基盤B17310154)、「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較」(2009-10 挑戦的萌芽21652019)、「大衆メディアに見る第二次世界大戦期と戦後秩序の中のジェンダー・エスニシティ」(2012-14 基盤C24510387)、「帝国解体と戦後秩序構築過程における大衆メディアのジェンダー・エスニシティ表象分析」(2015-17 基盤C15K01929)また、以下の学会におけるパネルやシンポジウムで研究成果を広く公開した。第57回日本西洋史学会シンポジウム「第二次大戦下、表象に見るヨーロッパと日本：ジェンダー・民族の視点から」(2007)、第7回ジェンダー史学会「パネル：第二次世界大戦下、表象にみるジェンダー秩序の揺らぎと再編 日本・ドイツ・イギリス」(2010)、CIAS他主催シンポジウム「ビジュアル・メディアとジェンダー」(2013)。また本研究グループ主催で一般に広く公開の以下のシンポジウムを開催した。「軍事化の<現在>を問う：ジェンダーの視点から」(基調講演 上野千鶴子 内容は『軍事主義とジェンダー』インパクト出版会より2008年に出版)、「第二次世界大戦とニッポン：表象・ジェンダー・エスニシティ」(2011)及び「Remapping Hiroshima: 「ヒロシマ」を(再)マッピングする 核時代の到来・起点としての「ヒロシマ」」(2015)。上記の研究過程を経て、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

第二次世界大戦という総力戦では女性も「国民」として動員され、戦争という巨大な暴力の行使に組み込まれた。総力戦となった第一次、また第二次世界大戦では、より多くの男性を戦場に送るため、軍隊に多くの女性が動員され、女性にも軍服に由来する制服が与えられるきっかけとなった。欧米同様に日本においても「女子通身隊」など、制服を身に付けて任務に当たった女性は存在し、映画にも取り上げられた。

国家の要請に応えた彼女たちの活動は「公=男性/私=女性」というジェンダー秩序を揺るがし、軍隊、警察官など、制服を身に付けて、それまで男性の占有領域であった職域に進出した。視覚的にもアピールする「制服美女」たちは、映画や雑誌などのメディアにとり上げられ、その

イメージは現代にいたるまで再生産され続けている。

本研究は、日本、アメリカ、イギリスの大衆メディアに取り上げられた制服の女性たちと、戦後は女性警察官を中心に、制服着用を伴うキャリアの表象について、戦時中から戦後 1970 年代まで調査し、戦後のジェンダー秩序や女性のキャリア形成の歴史的事実とどのような相関関係があるか、また現代にいたるまで表象の傾向がどのように継続しているのかを国際比較することを目的としている。第二次大戦以降、戦後 1950 年代、フェミニズム運動が盛んになる 1960 年代～1970 年代と期間を区切り、その期間の雑誌、映画などの大衆メディアから「制服美女」の表象を抽出し、日本、アメリカ、イギリスを中心とした国際比較を行なった。

制服は、ある組織や団体の活動内容と帰属意識を表象する媒体である。辻元よしふみが『スーツ＝軍服！？ スーツ・ファッションはミリタリー・ファッションの末裔だった！！』（彩流社、2008 年）で指摘したように紳士服の殆どは軍服に由来し、その傾向は現代の女性の制服にも反映されているが、若い女性の制服姿にはキャリアと帰属意識以外の意味が付与されている。制服姿の女性は、それまで重視されてきた家庭以外で「国民」としての存在をアピールするものであり、その若い女性の美しい制服姿は、雑誌、映画など大衆メディアでクローズアップされることもあった。本研究は、戦時中の女性に関する政策が戦後のジェンダー秩序や「国民」形成にどのような影響を及ぼしたのかを踏まえ、戦時中の「制服美女」たちの表象を分析してきた。また、戦時中の表象の傾向が、戦後の女性のキャリア形成や働く女性の表象にどのように継続されているか、あるいは変容しているかについて検討してきた。

「制服美女」の存在とその表象は、戦後のジェンダー平等に影響を与えたのか、それは現在における「女性活用」の表象を考える上でも重要な視点を提供する。制服姿の戦時下の女性たちは、戦時においては、国民を鼓舞するチアガールとして、これまでにない活躍の場を約束するリクルート要員として、戦時下の「輝く女性」となった。これまで本研究グループが取り組んだ研究により、戦時活動の女性は、総力戦下において「男性並みの」仕事ができる頼もしい存在として表象される一方、女性の領域を逸脱した彼女たちには笑顔、若さ、美しさなどの「女らしさ」の補完が求められてもいた。この傾向は、「女性の活躍」が求められる現在、社会進出する女性たちの表象を考える上でも示唆的である。また、国際比較をすることによって、各国のジェンダー表象の特徴があらわにされる。本研究は、国際的にジェンダー平等の推進が求められる現在、女性とそのキャリアのイメージをクリティカルに読むためのメディア・リテラシー養成に貢献する。

3. 研究の方法

第二次世界大戦期、戦後の 1950 年代、1960 年代、1970 年代に分け、日本、アメリカ、イギリスにおける雑誌、映画などの大衆メディアから、制服の女性表象を抽出し、表象の傾向について分析し、国際比較を行った。分析の際は、各国の女性の戦時活動に関する制度、キャリア形成、女性の職業選択の状況などを十分に考慮した。

分析する大衆メディアは、映画の他、日本、アメリカ、イギリスにおいて第二次世界大戦期から継続して刊行された一般大衆誌を対象とし、定期的に研究会を開催し、国際比較を行った。その際、対象国の社会・政治体制、女性の戦時動員、戦後の役割分担、階層やエスニシティの差異に留意した。研究機関を通じて、新たに揃えるべき資料・文献を収集し、戦前・戦後を総合的に考察した。定期的に研究会（2020 年度以降はオンライン開催）を開いた他、国内外の学会にて研究成果発表を行い、レビューを受けた。

分析対象にするメディアと担当については、杉村使乃はイギリスの戦前、戦時下、戦後を考える上で有効だと考えられる雑誌『ピクチャー・ポスト』（1938-1957）を中心に、1970 年代については『デイリー・ミラー』を適宜使用して、表象分析に取り組んだ。映画表象研究で実績のある池川玲子（日本女性史、表象文化論）は戦時下から 1970 年代までの日本映画、及び「制服美女」に関する雑誌・新聞記事を広く扱い、表象分析を担当した。平塚博子は本研究以前から分析に取り組んできた『ライフ』を中心に、アメリカにおけるジェンダー・人種・エスニシティの交錯を視野に入れて *JET Magazine* や *Ebony* というアフリカ系読者を対象とした雑誌の分析にも着手した。

4. 研究成果

第二次世界大戦という総力戦における大衆メディアを取り上げ、「国民」として包摂されたジェンダーや人種・エスニシティの表象と歴史的事実の確認を進めてきた。また、戦後において、女性やマイノリティの戦時貢献が、戦後の女性や民族に関する政策、ジェンダー秩序や「国民」形成にどのような影響を及ぼしたのかを検討してきた。アメリカ、日本、イギリスとも、総力戦下で男性に代わり、多くの女性たちが制服を身に付け組織や職業に帰属し、様々な業務に就いた。戦時下のメディア表象に見られた「制服美女」の「女性性からの逸脱」や「女性性の補完」は、戦後の女性に関する政策や職業の門戸開放の流れの中、どのように変容したのか検討した。期間中は、戦後 1950 年代、フェミニズム運動が盛んになる 1960 年代、1970 年代までを視野に入れ、映画や雑誌など一般大衆メディアの制服を身に付けた女性たちにターゲットを絞り、表象分析を行った。

イギリスでは、厳しい対独戦を強いられたバトル・オブ・ブリテン（1940 年 7 月-1941 年 5 月）後、女性を動員する法整備（the National Service No. 2 Act）が為され、陸海空軍の補助部隊と

して女性を積極的に採用した。多くの読者層を獲得していた写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』などのメディアは、これらの「制服美女」をカバーガールとして採用し、記事でもその活躍について触れた。「制服美女」のメディアの扱いは、戦況とリンクし、厳しい戦時下では彼女たちの若さと美しさ、笑顔での働きぶりが戦意高揚のため求められた。戦後も軍隊の女性補助部隊は存在したが、カバーガールに採用されることはなく、記事はドイツ駐在の補助部隊に関するもの1点に過ぎない。そこでは業務の安全性、家事を学ぶ機会があること、結婚の機会があることが強調される。一方、女性補助部隊リクルートのための広告は継続して掲載され、新しいキャリア、国際的な活動の魅力がアピールされている。

日本の場合について、池川は終戦間際の映画『北の三人』(1945)と、戦後に導入された女性警察官を扱った『婦人警官』(1947)を取り上げ、「制服美女」の表象について考察した。軍隊や警察の男性優位の構造に関わらず、双方の映画においては「制服美女」の活躍は時に男性をも凌ぐものとして描写されている。一方、『婦人警官』が描く女性の業務は、戦後の女性警察官に期待された「おんな・こども」への対応という役割を反映している。売春をする女性に対しては良き指導者として、戦争孤児に対しては「母性」を付与された表象が見られる。

第二次世界大戦下のアメリカも、それまでになく多くの仕事が女性たちに門戸を開き、女性たちは男性労働力の不足を補った。軍隊に女性が正式に動員されたのは初めてのことであったが、その「女性性からの逸脱」は組織としても、『ライフ』誌などメディア表象においても矛盾を孕む捉え方をされていた。与えられた仕事を的確にこなす有能な働き手であると同時に、「制服美女」たちの美貌や家庭での役割が強調されることもしばしばであった。戦後、「制服美女」たちは、読者層の多くが白人中産階級である『ライフ』からは姿を消す。政界への進出など、制服を着用しない女性の活躍は時折取り上げられるが、そこでは妻、母という役割も怠らない点が強調される。一方、アフリカ系アメリカ人が読者層の *JET Magazine* (1951年創刊) は、女性警察官というマイノリティ女性に開かれた職業を華々しく取り上げる。しかし、そこでもこの新しい「制服美女」の美貌や、家庭での役割への言及がある。

以上については、研究グループの杉村、池川、平塚の他、松崎洋子(敬和学園大学名誉教授「戦争とジェンダー表象研究会」メンバー、共著『軍事主義とジェンダー』)を研究協力者に迎え、International Federation for Research on Women's History (IFRWH) の2018年大会(於バンクーバー)で研究成果を報告した。部会のタイトルは“Are They Deviants From Femininity?: Women in Uniform in Wartime Mass Media of U.S.A., UK, and Japan.”で、各パネルは“Cover Girls or Efficient Working Women?: Women in Uniform during WWII Represented in British Popular Magazines”(杉村)、“Ambiguous Deviance From Femininity: American Women in Uniform in American Magazines During World War II”(平塚)、“Pretty Women in Uniform in Japanese Cinema during the Wartime and Occupation Eras”(池川)である。

その後、杉村は上述の『ピクチャー・ポスト』と共に少女向け月刊誌『ガールズ・オウン・ペーパー』を中心に制服着用の女性とその活動の表象について調査・分析を進めた。女性の制服着用の1例であるガールガイドを取り上げ、この運動の黎明期から二つの大戦におけるガールガイドの活動と表象について考察を進めた。またイギリスのガールガイドと、日本におけるガールガイド運動の導入、第二次世界大戦における衰退、アメリカ主導の戦後日本への導入(アメリカ式でガールスカウトとして)という流れと比較し、国際学会にて報告を行った。

池川は、第二次世界大戦時下、また戦後の日本映画より、軍隊と警察官における制服の女性像を抽出し、女性の社会進出の状況を踏まえ、考察を深めた。映画、雑誌、新聞など広く媒体を用い、特に女性警察の表象について着目し、分析を進めた。また、以前から取り組んでいた戦時下の映画における女性表象、スポーツにおける女性表象について考察を深め、招待公演にて研究成果を報告した。

平塚は、アメリカの『ライフ』について、戦後のトランスナショナルピリオディカルとしての側面と、ジェンダー表象を探り、制服姿の女性が戦後、誌面から姿を消していることという結論に達した。『ライフ』における「制服美女」の不在は、女性のキャリアと制服着用の有無が、階級、人種の格差に関係していることを明らかにし、この研究成果については、ジェンダー史学会にて報告した。

その後、研究対象である「制服美女」を女性警察官に集約し、新規に関連する資料を整え、日本、アメリカ、イギリスにおける表象の分析、国際比較に取り組んだ。総力戦で国家の要請に応えた女性たちはそれまでのジェンダー秩序を揺るがした。軍隊、警察官など、それまで男性が占有していた職域に進出した制服姿の若い女性たちは、一方では好奇の目を持って、また一方ではその活躍を期待されて、メディアにとり上げられた。女性警察官の表象にも、「女性性からの逸脱」と「女性性の補完」が見られるが、女性警察官導入の推移や各国の状況により差異が見られた。

女性警察官表象に関する研究成果については、ジェンダー史学会第18回年次大会(2021年12月12日オンライン開催)にて、部会D「戦後の女性警察官表象とキャリア形成における国際比較」として、本研究グループメンバー全員が報告した。この部会では「制服美女」として表象された女性警察官を取り上げ、杉村、平塚がそれぞれイギリス、アメリカについて、その黎明期から1970年代までの表象を分析した。そして池川が日本の女性警察官に関する通史的研究を踏まえ比較の視点を提示した。

杉村が担当した「イギリスの女性警察官表象」では、女性警察官の歩みを概観し、写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』、タブロイド紙『デイリー・ミラー』、また地方警察管内の広報誌『パトロール』掲載のカリカチュアを取り上げ、第二次世界大戦から、1970年代までの傾向について検討した。まずイギリスにおける第一次・第二次世界大戦前からの女性警察官の歩みを概観し、総力戦でその位置付けはどうか変化したのか、戦後において女性警察官という職業がどのように社会に受け入れられ、表象されたのかについて考察した。

イギリスでは警察官は男性の仕事として位置付けられていたが、第一次世界大戦における人手不足、そして女性の活動域の拡大に伴い、女性警察が導入される。女性警察には主に女性への対応が求められた。1919年、性差別撤廃法が通過すると、女性も首都警察に採用されるようになる。しかし彼女たちには依然として女性や子供への対応が求められ、パトロールには男性警察官が付き添うこともあった。

第二次世界大戦時には、陸空海軍同様、警察でも女性警察補助部隊が結成される。他の補助部隊同様、より多くの男性たちを現場に送るため、事務や運転など補助的な業務が主な任務であったが、警察官としての業務の割合も次第に大きくなって行く。一方、第二次世界大戦中の女性警察官について、写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』のような大衆メディアはその導入に懐疑的な世相を反映している。戦後は各署において女性の採用は増加し、既婚女性も勤務可能になった。しかし非実用的なスカート着用は1980年台後半まで求められる、メディアでも制服のデザインに注目が集まるなど「女性性の補完」が見られた。警察官という「女性性の逸脱」に伴う「女性性の補完」は維持されていたと言えるだろう。警察署内の機関紙『パトロール』掲載のカリカチュアにおいては、女性警察官の女性性を殊更に強調するものも少なくない。

平塚が担当した「アメリカの大衆メディアにおける女性警察と制服の表象」では第二次世界大戦以前からのアメリカの女性警察官の歴史と制服の位置づけを踏まえ、雑誌における表象をジェンダーとエスニシティに着目して考察した。19世紀半ばから第二次世界大戦期まで、アメリカにおいて女性警察は社会・道徳の改革に主眼をおいた、いわゆる女性的な仕事の担い手であった。この時期のアメリカの女性警察官の職務は、女性や子供の犯罪者の監督とケア、デスクワーク、駐車違反の取締りや交通整理といったものに限定されていた。

このようなアメリカの状況に変化が見られるのが、女性警察官の雇用の拡大および職務の多様化が始まる戦後から冷戦期である。女性警察官の制服は女性軍人の時と同様に、伝統的なジェンダー規範の逸脱している印象を和らげるツールとして使用されてきた。それと同時に、アメリカの女性警察官の間で制服に関してこれとは異なる見方もされており、戦後顕著になるアメリカの女性警察とジェンダーをめぐる問題の複雑さを示唆している。

以上を踏まえつつ、戦後のアメリカの大衆メディアにおいて女性警察とジェンダーはいかに表象されているかを検証した。白人中産階級の関心を反映した『ライフ』誌が女性警察官に殆ど紙面を割いていない一方、アフリカ系アメリカ人が読者層の *JET Magazine* (1951年創刊) では、女性警察官はマイノリティにも開かれたキャリアとしてクローズアップされていた。しかし彼女たちの美貌や「女らしさ」も同時に強調されていることが明らかになった。

池川は女性警察官に関する Jennifer Brown や Cara Rabe-hemp と Venessa Garcia などの先行研究を踏まえ、異文化横断的に女性警察官の立場を比較検討する指標を示した。1つは女性警察官の生成発展に関与するファクター（総力戦と男性人材の払底、兵士周辺の風紀問題など）、また生成と受容の段階である。本研究で取り上げた戦後から1970年代までの期間は、参入（分離制限された発展（「女性」に相応しい仕事に限定、別組織） 統合（機会均等法導入、組織の統合） 機会均等法の強制的施行による踏み切り点、の諸段階に該当する。しかし男性優位の文化は、組織内部ではハラスメントで、メディアでは女性警察官を殊更に性的な存在として表象することによって抵抗を示した。

総力戦に動員された「制服美女」たちのキャリアと表象の傾向、「女性性の逸脱」と「女性性の補完」は戦後から1970年代に至るまで継続されていたことが明らかになった。一方、女性のキャリアにおいては、アメリカのケースに見られたように、制服の着用の有無が社会におけるその職業の位置付けを示し、ひいては人種、エスニシティ、階級を反映している場合もある。アメリカのケースに見られたように、アフリカ系アメリカ人の女性警察官は、ジェンダー・人種の壁を乗り越えた「キャリアウーマン」として表象される一方、公民権運動を取り締まる主体という一面も担う。女性やマイノリティへの門戸開放により、その労働力が既存の社会構造の維持へと囲い込まれる、という危険性も孕んでいる。イギリスにおいても、警察という職業と階級は分かち難い問題である。各国の警察業務の差異、各年代における女性表象の一般的傾向も踏まえ、今後一層のジェンダー・人種・階級を踏まえた立体的な考察が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 池川 玲子	4. 巻 1
2. 論文標題 「傷痍軍人とスポーツ 日中戦争下の婦人会活動を中心に」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 科学研究費成果報告書 基盤研究B 2016 - 2018年度 戦争と慰問文化 - 慰問の実践とシステムに関する文化史研究 -	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平塚 博子	4. 巻 47
2. 論文標題 「ウイリアム・フォークナーとスポーツ, メディア」（プロシーディングス）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Soundings	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 SUGIMURA, Shino
2. 発表標題 "Girls Growing Up and Girl Guide/Scout Movement: A Comparative Study of Girl Guide/ Scout Movement in Britain and Japan during World War I and II"
3. 学会等名 Society for the History of Children and Youth Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池川 玲子
2. 発表標題 「映像で迎える女たちの満蒙開拓 エノケンから若尾文子、そして『告白』まで」
3. 学会等名 「8月15日を考える会」（小田原の市民団体）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池川 玲子
2. 発表標題 「甲子園の女子応援団史」
3. 学会等名 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター会議研究報告会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平塚 博子
2. 発表標題 「LIFE Asia Editionにおけるジェンダー表象」
3. 学会等名 ジェンダー史学会第16回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SUGIMURA Shino
2. 発表標題 “Cover Girls or Efficient Working Women?: Women in Uniform during WWII Represented in British Popular Magazines ”
3. 学会等名 International Federation for Research on Women's History (IFRWH) Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HIRATSUKA Hiroko
2. 発表標題 “ Ambiguous Deviance From Femininity: American Women in Uniform in American Magazines During World War II ”
3. 学会等名 International Federation for Research on Women's History (IFRWH) Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 IKEGAWA Reiko
2. 発表標題 “Pretty Women in Uniform in Japanese Cinema during the Wartime and Occupation Eras”
3. 学会等名 International Federation for Research on Women's History (IFRWH) Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池川 玲子
2. 発表標題 「傷痍軍人とスポーツ 日中戦争下の婦人会慰問活動を中心に」
3. 学会等名 2018年度 ジェンダー史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池川 玲子
2. 発表標題 「高校野球と女子 禁制と解禁をめぐる百年史」
3. 学会等名 総合女性史学会 2018年度大会「ケガレ観の歴史的形成とジェンダー」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 使乃
2. 発表標題 部会D「戦後の女性警察官表象とキャリア形成における国際比較」報告 「イギリスの女性警察官表象」
3. 学会等名 ジェンダー史学会第18回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平塚 博子
2. 発表標題 部会D「戦後の女性警察官表象とキャリア形成における国際比較」 報告 「アメリカの大衆メディアにおける女性警察と制服の表象」
3. 学会等名 ジェンダー史学会第18回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池川 玲子
2. 発表標題 部会D「戦後の女性警察官表象とキャリア形成における国際比較」(ディスカッサント)
3. 学会等名 ジェンダー史学会第18回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平塚 博子
2. 発表標題 「ウィリアム・フォークナーとスポーツ, メディア」(シンポジウム「英米文学とスポーツ」(司会・講師: 杉野健太郎, 講師: 中村美帆子, 下楠昌哉, 平塚博子))
3. 学会等名 サウンディングズ英語英米文学会 第73回研究発表会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 杉村使乃	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 234
3. 書名 『制服ガールの総力戦』	

1. 著者名 今関敏子編著, 岩佐美代子, 別府節子, 藤岡道子, 福島理子, 山本志乃, 池川玲子, 身崎とめこ, 佐浦弘一, 清水新二, 直井道子, 柳家花緑, 安井信子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青簡舎	5. 総ページ数 360 (183-211)
3. 書名 『家の文化学』(「女優原節子の住んだ家」)	

1. 著者名 富士川義之編著, 原田範行, 藤巻明, 大石和欣, 吉川朗子, 田中裕介, 大淵利春, 道家英穂, 兼武道, 山田美穂子, 結城英雄, 田尻芳樹, 辻昌宏, 高岸冬詩, 鎌田禎子, 島貫香代子, 平塚博子, 本莊忠大, 山辺省太, 松井美穂, 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 438 (262-274)
3. 書名 『ノンフィクションの英米文学』(「文学とアクティビズムの融合: 『夢を殺す人』の現代性」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	池川 玲子 (IKEGAWA Reiko) (50751012)	日本女子大学・家政学部・研究員 (32670)	
研究分担者	平塚 博子 (HIRATSUKA Hi roko) (80407379)	日本大学・生産工学部・准教授 (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------